Topics 学長インタビュー

純心教育の基本を忘れず 地域と共に発展する大学を目指して

2014（平成26）年４月に就任した片岡瑠美子新学長に、これからの長崎純心大学が目指す方向性などについて語っていただきました。聞き手は、英語情報学科長の畠山均教授です。

学長に就任されて、今のご心境はいかがですか。

学長としての業務をこなしているとあっという間に時間が経ち、自分の時間を持つこともままならない状況ですが、焦る気持ちはありません。理事長、副学長、学部長、事務局長、皆さんにご尽力いただいている中、学長として自分のやるべきことを探し、やるべきことをやるという気持ちでいます。

平成二十七年には学園創立八十周年を迎えますが、今後の大学運営の方向性をお聞かせください。

学校教育法の改正で、学長のリーダーシップ、ガバナンス改革と言われていますが、本学の場合には、極端な問題を抱えていないので、今までとほとんど変わりません。

それは、創立の精神があって、柱がぶれていないからだと思います。学園の創立八十年を迎えますが、基本となっていること、それはやはりカトリック大学であることだと思います。

そして、カトリック学校のほとんどは修道会が設立母体となっていますが、カトリック学校は創立者のインスピレーションで始まり、創立者の建学の精神を継続するために修道会ができました。

教育は二十年、三十年で実がでて終わりではありません。でも百年とか、そこまで続けることは個人では無理です。教育を続けるために修道会ができて、そして修道会は自分たちの使命は何かを絶えず考え、常に創立者の精神を探していきます。ですから、修道会が設立母体となっている学校の教育はぶれないのだと思います。

時と場合によって、常に建学の精神、あるいは創立者の精神を振り返りながら、今後もミッションを追及していくということ、まさに「継続は力なり」という気持ちでということでしょうか。何か始めるのは大変ですが、続けるのはそれ以上に大変だと思います。

花火的にぱっとやるのは楽しくできるかもしれません。でも、教育は種まきだと思います。卒業生が何十年も経って「あの頃に教えていただいたことが今やっとわかりました」と言ってくれます。それは大変嬉しいことであり、教育の喜びでもあります。

大学の地域貢献ということが今、注目されています。地域社会に大学の教育研究の成果を還元することについて、具体的なプランはありますか。

数年前から地域貢献という課題が出されていますが、私たちの修道会である純心聖母会の設立自体が「地域」なんです。明治初期の迫害である「浦上四番崩れ」の後、人々は貧しくて教育を受けるゆとりがありませんでした。でも母親が教育を受けなければ子供に影響を与えられない。だから賢い母親になる女子を教育するための修道会が欲しいということを、長崎教区の神父たちが、初来日したローマ教皇の使節に言っています。そして、ローマに戻った使節の報告書に、長崎では司祭たちが教区の信者のための学校を求めているので、女子の学校教育を目的とする女子修道会を設立する必要があると記しています。その時のバチカンの福音宣教省長官が、本学園の創立者である早坂司教が司教叙階を受けた時の長官です。

早坂司教の叙階は使節の報告の後になります。ですから早坂司教に学校教育の修道会を創るという使命がくだされたのは、長崎の司祭たちの願いが届いていたからだと思います。こうして純心女子学園が創立されたということは、最初から本学は「地域」の中にある学校なのだと思います。

また、教育の力が人間形

成に大切だということで、地域に役立つ学校を創りたいという想いから、短期大学においては、教員を養成する社会科、保育士を養成する保育科を設置しました。そして、四年制大学として、保育科の流れを汲む児童保育学科、長崎の歴史を中心とする比較文化学科、人間心理学科も地域には無い必要な分野ですし、原爆の犠牲の中から再出発した本学の使命として、現代福祉学科がいち早く設置されました。そういう純心教育の基本を見てくると、イコール地域貢献だと思います。そして修道会の本部も長崎から動かさず、長崎という地域の中で教育・福祉をぶれないでやってきました。

今年の三ツ山地区の夏祭りに足を運んだところ、地域の祭にシスターが来てくれたと喜んでくださいました。私たちが三ツ山に来た頃、若者が空き地で浮立の稽古をしているのを目にしていましたが、今は後継者が居ないそうで、本学で浮立を継承できないかなと思っています。

地域の伝統芸能を大学で継承することも重要な地域貢献ですね。

そして、現代福祉学科の福祉の調査も、長崎市内の他の地区では行っていたのに、この三ツ山地区では調査をしていないことへの気づきがあり、地区の人や原爆ホームの方と一緒に掃除をしたり、聞き取り調査をしたりといったことを学科で企画しています。

まさにそれは研究と教育を基にした地域貢献ですね。

学生の身近に実行できる場所があるんです。そういう意味では、地域との連携、地域貢献をすばらしい「作品」にしないで、地道に、地域の人と一緒に過ごす。そうすればもっと地域の方とのコミュニケーション、関係性ができるのではないかと思います。

今までは、この地域を知ろうとする、その姿勢が欠けていたと思います。

先生は、もちろん、研究者でもおられますので、ご専門であるキリシタン史の分野での今後の研究の展望をお聞かせください。

二〇一五年は信徒発見百五十周年ということでもあり、本学博物館の原資料を使った出版を予定しています。

一八六五年の信徒発見の記述がプチジャン司教の手紙にあるのですが、その写しは手書きなんです。その原資料を翻刻して、あらためて翻訳を見直し、新しい研究成果を加えて出版する予定です。

一八六五年は江戸時代でまだ迫害が続いていたので、プチジャン神父は、パリの本部に手紙を書く時には地名を記号化して書いています。そして手紙とは別に記号の一覧表を送っているんです。その一覧表は見つかっていないんですけどね。

例えば「黒崎」という地名は、逆からアルファベットを並べていくんです。プチジャン神父はあちこちに地名を書いているのですが、分かりにくいものもあります。他の史料と比べてみると、別の史料にはたとえば黒い岬と書いてある、黒い岬は黒崎って、確認ができるのです。

その出版を終えたら自分の本来の研究に戻れると思っています。

学長職はこれからますます忙しくなりそうですがいかがですか。

でも心配はしていません。教職員の皆さんが、それぞれの分野でがんばってくださる、それを取りまとめていく仕事が学長としてのリーダーシップ、大学ガバナンスだと思います。

本日はどうもありがとうございました。

（インタビュー日 二〇一四年十一月二十一日）